

宮崎
大学

附属農業博物館ニュース

No. 24

21世紀の農業

「食と環境の調和をめざして」

平成14年度特別展示



キャンパス近くの加江田川の上流

宮崎大学農学部 附属農業博物館
AGRICULTURAL MUSEUM, MIYAZAKI UNIVERSITY

はじめに

附属自然共生フィールド科学教育研究センター（フィールドセンター）はこれまでの農場（牧場を含む）、演習林、水産実験所を統合し、総合的な農学の教育、研究を行う施設として平成13年4月1日に設立されました。ここには3部門（共生システム農学部門、食総合科学部門、環境科学部門）と4附帯施設（木花フィールド、住吉フィールド、田野フィールド、延岡フィールド）があります。フィールドの場は宮崎県内に分散し、総面積約700haであり、自然豊かな地域です。それぞれの部門と附帯施設が協力して、食と環境の調和、自然との共生を主眼とした教育、研究をすすめ、内外に開かれた施設となることを目指しています。

さて、博物館の今年度の展示では「21世紀の農業－食と環境の調和をめざして－」のテーマで、フィールドセンターの4附帯施設の教育、研究、管理などの概要がわかりやすく紹介されています。この展示により当施設の役割を理解され、フィールドの教育、研究、研修などに大いに利用していただきたいと思っています。



木花フィールド（農場）



木花フィールドは、大学の敷地内にあり、学部の教育、研究に多面的に利用されています。農場でもセンター科目として「企画実習」を開講し、40名ほどの学生が、播種から収穫、さらには販売まで取り組んでいます。このほか、「あなたが主役！体験農業」はすでに12回目で、「農場を利用した野菜栽培」の公開講座は3回目を迎えています。また、大学開放でも、ミカン狩り、芋掘り、鉢物、農産物の販売は人気があり、幼稚園児、小・中学生に農業体験の場を提供しています。



企画実習の様子

住吉フィールド（牧場）



住吉フィールドは、宮崎市の北、メインキャンパスから約21kmの海岸線近くに位置しております。総面積50ha（飼料畑、草場が約40ha）を有し、乳用牛20頭、肉用牛150頭、めん羊10頭が飼養されています。広大な圃場を利用して、飼料生産と放牧を組合わせた家畜生産が行われており、場内で生産された生乳を用いた牛乳の生産も行われています。また、地域の養護学校生や中学校生などの学外体験実習の場としても利用されています。



飼育されている牛（黒毛和種）

田野フィールド（演習林）



田野フィールドは、田野地区、大納地区、崎田地区の3地区からなり計約620haの森林が有ります。田野地区は宮崎平野の西端に位置し、面積は約500haの里山です。南九州では数少なくなったヒノキ壮齢林やシイカシなどからなる常緑広葉樹林の天然性二次林をまとめた面積で残し、林道密度が57m/haと高い点が特徴です。大納地区は日南海岸に面し面積は約60haであり海岸域造林が特徴です。崎田地区は志布志湾に面し面積は約60haあり全国的に貴重な天然性海岸風衝群落が残存しています。



田野地区林内に自生するヤッコソウ

延岡フィールド（水産実験所）



延岡フィールド（水産実験所）は、宮崎県北部、延岡市赤水町にあり、実習船、海水魚飼育施設等を備え、海や海の生物を対象とした体験的教育の場として利用されています。さらに、沿岸魚類の生理生態、養殖魚の病気等の研究にも利用されています。現在では九州東岸における魚類を中心とした水生生物の研究拠点として重要度を増しているほか、地域の水産業に対するアドバイザーとしての役割も果たしています。



実習船での実習の様子

地域の学校教育との連携・支援

「今日はあなたも研究者」夏休み実験講座

当館では、平成11年度から、周辺地域の中学生を対象とした実験講座を行っています。

本年度は7月29日に近隣の加納中学校と木花中学校の生徒さんを対象に実施いたしました。

講座では、「化学実験で食品の成分をしらべてみよう」、「ミクロの眼で見てみよう」の2つの実験を行いました。

参加した生徒さんは、大学の実験設備を利用した実験に、大変興味深い様子でした。



青少年科学の祭典

この企画は科学技術庁の企画、(財)日本科学技術振興財団の事業として毎年、全国数カ所の都市を会場に開催されている科学イベントです。会場では、毎年、県内の小・中・高・高専・大学の先生方による、工夫を凝らした実験ブースが展示されています。

平成14年度は「青少年のための科学の祭典 宮崎大会」として、8月9日(金)~11日(日)の3日間、宮崎市の宮崎科学技術館を会場に行われました。農学部からは、「光で遊ぼう」、「土の不思議を科学しよう」、「お掃除を科学しよう」、「ミクロの世界を科学しよう」の4つの実験ブースが展示され、多くの小中学生がさまざまな実験を通し「科学の不思議とおもしろさ」を体験しました。



農業博物館出張講座

博物館では、農学部の教官が講師として県内の学校に出向き、最新の研究成果を紹介しながら生徒さんたちに、農業や環境の大切さを考えてもらうための「出張講座」を行っております。

本年度の講座では、「環境を考える農業ロボットたち」と「稲作の発達と環境の変化」の2つの講座を宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校と宮崎県立飯野高等学校で実施いたしました。



学内や地域への情報発信

大学開放日特別事業 本年度は平成14年11月10日（日曜日）に開催されました。

「ミクロの目で見てみよう」

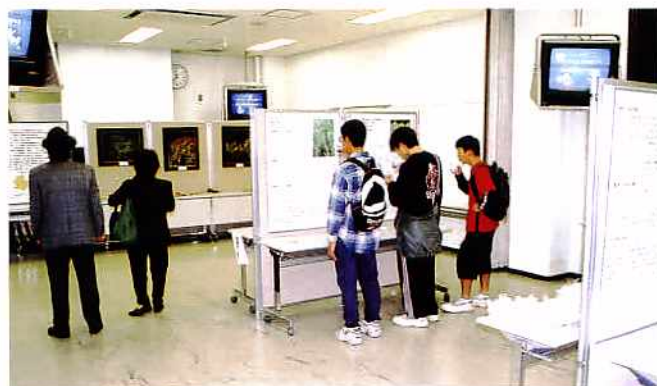
小中学生や一般の方々に、大学の研究に用いられている様々な顕微鏡（生物顕微鏡、実体顕微鏡、偏光顕微鏡、ビデオ顕微鏡、コンピューター顕微鏡、電子顕微鏡）を実際に操作しながら、スズメバチや蝶といった昆虫、身近な岩石、さらには、自分の皮膚などの観察を体験してもらいました。



「日本の食と伝統を支えてきた米や雑穀について学ぶ」

現在では、あまり食べる機会のないお米や雑穀を準備して、それらを味わいながら、お米や雑穀についてのいろいろな知識を深めてもらうコーナーを準備いたしました。

インディカ米やキビめしなど、口にできる機会が少ないごはんが大変好評でした。



「附属農業博物館特別開放」

特別開放企画として、来館者にデジタルカメラによる記念写真撮影を行いました。入り口のライオンの剥製と記念撮影する来館者の方が多くみられました。

また、骨格標本展示や土壌標本展示をはじめ、今年の特別展示についても、来館者からさまざまな質問が出されていました。



講演会の開催

博物館では、特別展示と連携した学術講演会を毎年実施しております。平成14年度は、企画展示を担当いただいたフィールド科学教育研究センターと共催で、地域づくりや地域再生の一つの鍵として注目されている「地元学（じもとがく）」の第一人者である吉本哲郎氏（水俣市農林水産課課長・地元学協会事務局長）に「地元で学ぶ地元学」というタイトルでご講演をいただきました。

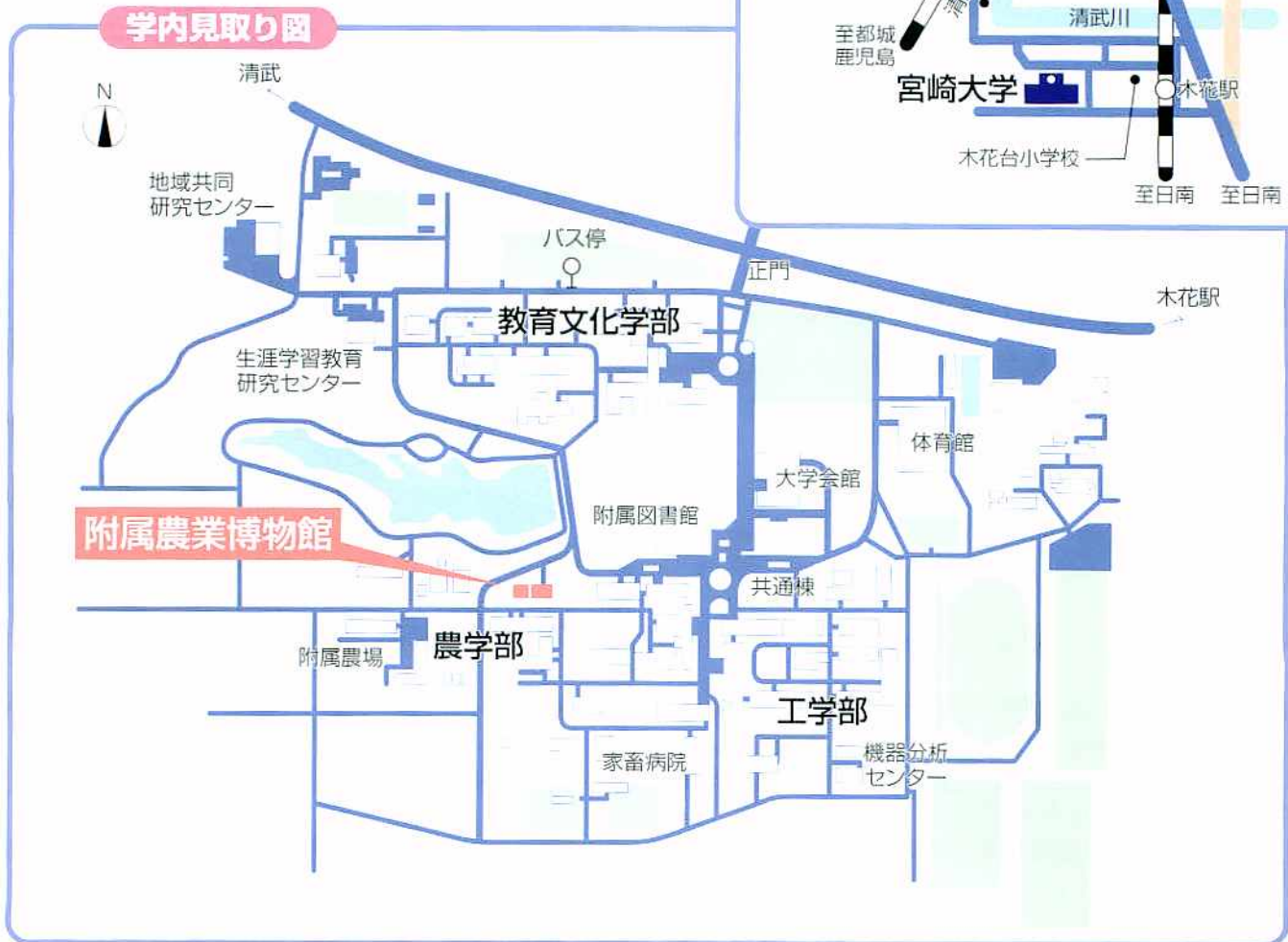
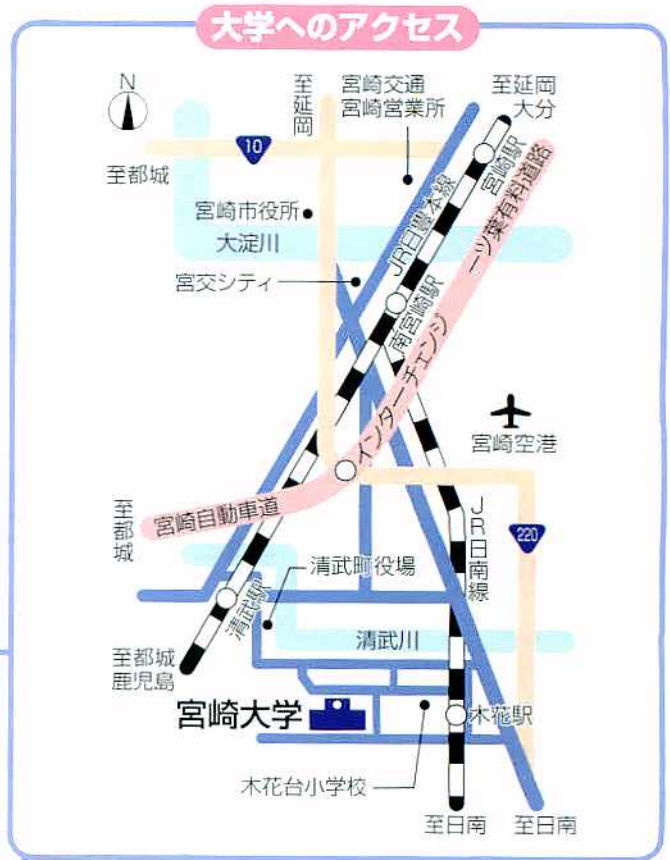
講演では、水俣市の再生を模索してゆく中で地元学が形づくられていった経緯を通し、地元学の意義とその魅力が紹介され、大変好評でした。



大学へのアクセスと学内見取り図



開館時間 9:00~16:00
 休館日土曜・日曜・祝日・年末年始
 (大学祭、大学開放日には開館しています。)
 入場料 無料(20人以上はご連絡下さい)



平成14年度博物館スタッフ

附属農業博物館職員

館長 長友 由隆 専任教官 宇田津徹明
 事業部員 武田 博 研究部員 那須 哲夫

博物館運営委員

食料生産科学科	鉄村 琢哉	応用生物科学科	吉田 直人
食料生産科学科	森田 哲夫	応用生物科学科	榊原 陽一
生物環境科学科	井戸田幸子	獣医学科	永友 寛司
生物環境科学科	林 雅弘	獣医学科	永延 清和
地域農業システム学科	武藤 勲	事務長	長田勝三郎
地域農業システム学科	藤掛 一郎		

宮崎大学農学部附属農業博物館

〒889-2192 宮崎市学園木花台西1-1
 TEL/FAX: 0985-58-2898
 E-mail: a-museum@cc.miyazaki-u.ac.jp
 HP: <http://www.agr.miyazaki-u.ac.jp/museum/>